

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：13401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23531176

研究課題名(和文)小・中学生の「言語力」を育成・評価する方法の実証的・実践的研究

研究課題名(英文)Empirical, practicing research on method of promoting and evaluating elementary and junior high school student's "Language power"

研究代表者

松友 一雄 (Matsutomo, Kazuo)

福井大学・教育地域科学部・准教授

研究者番号：90324136

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、小・中学生の言語パフォーマンスの質に関して以下の3つの関係性の質として分析考察を進めた。

教師と学習者の関係を観点とした研究グループにおいては教師のインターベンションとその効果を類型化し、学習者の言語パフォーマンスの質の向上に与える影響を明らかにした。学習者相互の関係性を観点とした研究グループでは学習者相互の対話を収集し、それらが個人の言語パフォーマンスの質に及ぼす影響を明らかにした。学習者自身との関係性を観点とした研究グループにおいては、学習過程の構成方法や課題の提示方法などに着目して、学習者自身の教材理解の質と言語パフォーマンスの質の関係を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this study, we advance the analysis consideration as the quality of the following three relationship with respect to the quality of the language performance of elementary and junior high school students.

In the study group, which was the point of view the relationship between teachers and learners to typify intervention and its effect of the teacher, was to clarify the impact on improving the quality of language performance of learners. the research group of the relationship was a point of view of learners cross collects interaction learners cross, they revealed the effect on the quality of the individual language performance. In the learners themselves and research group that the relationship was with the point of view of, by paying attention, such as in how to configure and challenges presentation method of the learning process, it is clear the relationship between the quality of the learner's own quality and language performance of materials understanding I was in.

研究分野：国語科教育学

キーワード：言語力 言語パフォーマンス コミュニケーション能力 教師の見取り 教師のインターベンション

1. 研究開始当初の背景

(1) 国内の研究動向と位置づけ

新しい学習指導要領において、教科を超えて「言語力」を育成することが示唆されて以来、「言語力」の内実に関する学力論的研究が国語科教育のみならず全ての教科で進められている。特に他教科で進められている「言語力」の内実に関する研究では、それぞれの教科が本来、学習活動として「ことばを使う」場面を支える能力として把握される傾向が強い。それは、以下の四つの言語力である。

- ・ 話し合いの場面を支える「コミュニケーション能力」
- ・ 文章を書く場面を支える「文章表現能力」
- ・ 調べ学習を支える「情報収集力」及び「情報活用能力」
- ・ 発表する場面を支える「プレゼンテーション能力」

このような能力は、学習者の言語パフォーマンスとして「見ることのできる」能力である。

それゆえに、学習者の言語パフォーマンスを評価する場合には、従来行われてきた「テスト法」では測定することができない。我が国の評価研究においては、現在こうした学習者のパフォーマンスそのものを評価するために次に挙げるような研究が進められている。

- ・ 授業の中で学習者のパフォーマンスを現出させるための学習課題の研究
西岡加名恵・田中耕治(2009)『「活用する力」を育てる授業と評価』などに見られるパフォーマンス課題に関する研究
- ・ 学習者のパフォーマンスの質を段階的に記述した評価基準の研究
高浦勝義(2004)『絶対評価とルーブリックの理論と実際』などに見られる「ルーブリック」の開発及び研究

これら先行研究に基づきながら、本研究は対象を小学生の「言語パフォーマンス能力」に焦点化し、従来の国語学力研究及び国語評価研究の知見を生かしながら、現在重視されている「言語力」の評価方法を開発する為の研究であると位置づけられる。

(2) 国外の研究動向の位置づけ

1990年代、アメリカでは構成主義的な学習理論の展開を背景にして、「オーセンティック評価」が注目された。これは、標準テストを中心とする従来の評価方法の批判的検討を通して、評価の方法のみならず学習内容及び学習方法の改善へと展開し、さらにはカリキュラム改善へと至る大きな潮流となった。この流れは、学習者がより実際の場面や状況の中で自らの知識や技能を活用することを求め、そのパフォーマンスの質を評価しようとするもので、「パフォーマンス評価」

の一つであると言える。同時期、イギリスでは、学習者の「高次のパフォーマンス」に焦点を当てようとする学力論の流れが先行した点はアメリカと異なるが、「標準評価課題」を「パフォーマンス化」し、1990年代前半を中心に、評価によって学習指導を歪めないことを目的として、教室で教師が行う評価を重視し、総合的で生活文脈に即した学習課題を設定した学習が主流となり、構成主義的な学習理論に基づく教育実践が行われた。このような英米の先行研究の蓄積が本研究の理論的実践的支えになることは言うまでもないが、さらに先行する英米二国の現状を把握し、既に生じている問題点の解消を加えた評価方法の開発を進めていきたいと考えている。

(3) 着想に至った経緯

研究代表者は、これまで国語学力論研究及び国語評価論研究を行ってきた。その研究の中で、特に近年は「コミュニケーション能力」の内実と評価方法の研究を進めてきた。そもそも「コミュニケーション能力」は、「言語パフォーマンス能力」の一つであり、複合的で協働的な要素が強いため評価することが非常に難しい能力である。しかしながら、学習者のパフォーマンスを内面で支える「方法的知識」の存在に注目し、学習者の方法的知識と「パフォーマンスの質」の関係性を捉えるための研究に着手した。また一方で、英米で先行して研究が進められている「パフォーマンス評価」に着目し、効果的で実行可能な評価方法の開発に着手した。

一方で研究協力者は中・高等学校を対象にした国語科授業論研究を進めてきた。実際の国語科授業過程の中で、学習者が行う「言語活動」は、学習者の言語能力を主たる要素としながらも、学習課題や学習活動の質、教材と学習者との関係性や学習集団のあり方など、学習活動との関係を分析の観点に入れることで、より実際の学習者の「言語パフォーマンス」を把握することが可能であることを提案した。

そこで本研究では学習者の「言語パフォーマンス」の質的側面を「外的要因との関係」(国語科授業のあり方が学習者に及ぼす様々な要因)と「内的要因との関係」(学習経験をメタ認知することによって得られた方法的知識の有り様)の二側面から把握し、言語パフォーマンスの質を評価する方法を模索する研究、効果的にその質を高める学習方法の探究を進めることとした。

2. 研究の目的

本研究では、小・中学生の言語活動の質を評価するために必要な評価尺度である、「言語パフォーマンス能力」を「コミュニケーション能力」「文章表現能力」「情報操作能力」の三つに焦点化して捉え、段階的に記述した「ルーブリック」を開発することを第一の目

的としている。さらに、実際のパフォーマンスを内面的に支える知識としてのメタ知識、特に「方法的知識」との関係性を明らかにし、学習者の言語パフォーマンスの質を向上させる学習方法を探究することを第二の目的としている。

3. 研究の方法

(1) 平成23年度

「言語パフォーマンス」の収集に関しては、三つの言語パフォーマンス能力に焦点化して、それぞれに質の高いパフォーマンスが収集できる可能性の高い学校を対象に調査する。収集する対象学年は、言語能力の発達段階の関係から小学校1,3,6年生及び中学校2年生とする。収集方法はビデオ撮影によるものとするが、実際の国語科授業においてみられる学習者の言語パフォーマンスを対象とした収集を行うために、「パフォーマンス課題」及び「見通しの持てる言語活動」を考案する研究と連動して行い、自然な学習活動の中での「言語パフォーマンス」を捉えるようにする。あわせて、内的要因として想定している学習者が「学びの振り返り」等のメタ認知から獲得した言語パフォーマンスに関する「方法的知識」の実態を捉えるために、学習後の振り返りを収集する。また、調査対象校は以下の通りである。

<コミュニケーション能力>

：福井県福井市立中藤小学校

<文章表現能力>

：石川県金沢市立南木立野小学校

<情報操作力>

：福井県永平寺町上志比小学校

(2) 平成24年度

小学生の「言語パフォーマンス」の収集は平成23年度で終了し、中学校のデータ収集を開始する。対象校は、研究協力が共同研究を進めている兵庫県西宮市立学文中学校及び武庫川女子大学附属中学校の二校とする。それと同時に収集した資料を分析し、9年間の「ルーブリック」を作成する。同時に「ルーブリック」作成のために、諸外国で進められている「ルーブリック」に関する研究を集め、効果的な収集の方法や分析の観点を吟味し、本研究の方法に修正を加える。

(3) 平成25年度

平成25年度からは作成した「ルーブリック」に基づき、国語科授業を対象にした学習方法の分析と考察を行う。調査校全てを対象校とし、学習者の「言語パフォーマンスの質」の実態と変容を把握する。この研究を通して、作成した「ルーブリック」の妥当性及び信用性を検証するとともに、実際の国語科授業のどの要因が学習者の「言語パフォーマンス」の質に影響を及ぼしているのかという点を明らかにし、効果的な授業のあり方を、「学習課題」「言語活動」「振り返り」の三つの

ポイントから提言する。

4. 研究成果

(1) 平成23年度

「言語パフォーマンス」の収集に関しては、三つの言語パフォーマンス能力に焦点化して、それぞれに質の高いパフォーマンスが収集できる可能性の高い学校を対象に調査した。収集する対象学年は、言語能力の発達段階の関係から小学校1,3,6年生及び中学校2年生とした。収集方法はビデオ撮影によるものとしたが、実際の国語科授業においてみられる学習者の言語パフォーマンスを対象とした収集を行うために、「パフォーマンス課題」及び「見通しの持てる言語活動」を考案する研究と連動して行い、自然な学習活動の中での「言語パフォーマンス」を捉えた。あわせて、内的要因として想定している学習者が「学びの振り返り」等のメタ認知から獲得した言語パフォーマンスに関する「方法的知識」の実態を捉えるために、学習後の振り返りを収集した。

また、調査対象校と選定理由は以下の通りである。

<コミュニケーション能力>

対象学校：福井県福井市立中藤小学校

当該小学校は、研究代表者が平成18年度から継続的に「伝え合う力の育成と対話型学習」という研究テーマで協同研究を進めている学校で、学習者の「コミュニケーション能力」が豊かに育っている。

<文章表現能力>

対象学校：石川県金沢市立鞍月小学校

当該小学校は、研究代表者が平成22年度から協同研究を進めている学校で、「言語力育成」のための取り組みの中でも「文章表現能力」の育成に焦点を当てているため、学習者の文章表現力が育っている。

<情報操作力>

対象学校：福井県永平寺町立上志比小学校

当該小学校は研究代表者が平成19年度から継続的に「思考力を育成する対話型授業」という研究テーマで、豊かな情報を操作して考えたり話し合ったりする学習を行っている。

小中学生の「言語パフォーマンス」の質を把握するためのルーブリックの作成に向けて、授業時における学習者の「言語パフォーマンス」を映像データ及び文字データとして集積し、学習者の言語能力との関係性、授業における教師の教育的関わりとの関係性、授業における学習者相互のコミュニケーションとの関係性の三つの観点から分析を加えた。

この観点から分析を進めた結果、学習者の持っている固定的な言語能力との相関性を

認めつつも、実際の授業場面では、教師や他の学習者、教材や掲示物などとのコミュニケーションを通して、言語パフォーマンスの質が流動的に変化していくことが明らかになった。次に の観点からの分析を進めた結果、「情報処理能力」や「文章表現能力」を基盤にした言語パフォーマンスでは、教師により教育的関わりの影響を強く受けて、パフォーマンスの質が向上することが明らかになった。さらに、 の観点からの分析を通して、「コミュニケーション能力」を基盤にした言語パフォーマンスは、学習者相互の多様なコミュニケーションを通して、その質が向上していくことが明らかになった。

このような分析の結果に基づいて、言語パフォーマンスの質と相関性が高い後者2つの観点に着目すると、授業における学習者の言語パフォーマンスは、教師や学習者、教材などとのコミュニケーションを通して変動する現象的なものであり、その変動をプラスに導くための学習環境やコミュニケーションを模索することが学習者の言語パフォーマンス能力を育成するために有効であることが明らかになった。

(2) 平成24年度

小学生の「言語パフォーマンス」の質を把握するための観点として、 教師と学習者のコミュニケーション、 学習者個人の言語能力、 学習者相互のコミュニケーションの三つに焦点を当てて研究を進めている。この三つの観点からそれぞれの研究実績を以下に説明する。

「観点 教師と学習者のコミュニケーション」については、特に教師の行う「インターベンション」が学習者の言語パフォーマンスの質を向上させる働きを持っていることに着目した研究を進めた。特に小学校の授業の中で行われる教師の「インターベンション」を抽出し、学習者の言語パフォーマンスに与える影響を分析することによって、教師の「インターベンション」を類型化するとともに、教師が学習者の言語パフォーマンスのどこに目を向けているのかという点を明らかにした。この研究によって、教師の授業におけるコミュニケーション能力の具体的な内実が明らかになり、授業力向上のための研修プログラムの構築に役立つ知見が得られた。「観点 学習者個人の言語能力」については、授業の中で学習者が行う説明や発表の内容を抽出し、語彙や概念の使用状況、論理的枠組みの有無と種類などの観点から分析し、結果として「言語パフォーマンスの質」がどのように向上しているのかという点を捉えるための基礎調査を進めた。引き続きこの観点での分析を進め、学習者の言語パフォーマンスの質を表現内容の質からより分析的に把握するための観点を作成することにつながる。

「観点 学習者相互のコミュニケーション」

については、特に学習者同士のやりとりの変化に着目し、相互交流が深化発展していくためのきっかけとなるものが何であるのかという点を現象的に探っていく研究を進めている。さらに学習課題との関係性や参加している学習者の意識の変容との関係性を観点に加えた分析を進めた。

(3) 平成25年度

授業における小学生の言語パフォーマンスをコミュニケーション行為であると捉え、その質に関して以下の三つの関係性におけるコミュニケーションの質として捉え分析考察を進めている。 教師と学習者の関係、 学習者相互の関係、 学習者自身との関係の三つの点に即して以下に本年度の研究の進捗状況をまとめることとする。

教師と学習者の関係を観点とした研究グループ(松友、大和)においては、教師の教授行為としての「インターベンション」に着目し、国語の授業における教師のインターベンションをデータ化し、学齢との関係性から分析を加え、学齢固有のインターベンションによって育まれる学習者の言語パフォーマンスの質を系統化する研究を進めた。その結果、本年度は、特に小学校低学年における「表現にこだわりイメージ化を促進するインターベンション」や「構文力を育成するために文構造を整えるインターベンション」など学齢固有のインターベンションを事例から見出し、その結果学習者の言語パフォーマンスに生み出されるイメージ的理解に表現の豊かさに関する指標や、構文力育成に支えられた学習者の表現における確かさ及び詳しさをの指標を提案することができた。

学習者相互のコミュニケーションを観点にした研究グループでは、研究資料の収集が不十分であったために分析が停滞している状況にある。

学習者自身との関係グループ(松友、宮本)においては、国語科授業における教材理解の状況と学習者自身の言語能力を観点にして学習者の言語パフォーマンスの質を把握するための観点と指標を作成することに取り組んだ。特に今年度は学習過程の構成方法や課題の提示方法など学習活動の要因と学習者の教材理解の質との関係性に着目し、効果的な学習過程の構成、理解しやすい学習課題提示の方法などによって学習者の言語パフォーマンスの質が向上することを明らかにした。

(4) 平成26年度

言語活動を取り入れた授業が多くの学校現場で行われ始めた平成23年度に受託した本研究は、教育現場の研究動向と連動する形で進められてきた経緯がある。当初の研究の方向性を改めて振り返ってみると、「学習者の言語パフォーマンスの質を把握するためのスケールの開発」であった。

多くの教育実践を収集し、その中で行われている多くの学習者の言語活動に分析を加えることで、その質を支える要素を抽出し、その発達の契機を抽出することでスケールの作成を実現しようとしてきた。その研究成果は本報告書の第一章において取りまとめられている。

しかし、実際の授業の中で逐一行われている学習者の言語活動に対して、「スケール」を用いた従来の評価活動が適応できるわけではない点に気がついたとき、本研究の方向性は大きく転換した。即時的に行われる学習者の言語活動に対して、教師は即時的に「見取り」、学習者や学習集団とのコミュニケーションを通して、言語パフォーマンスの質を高める学習場面をその場で作り出していかなければならない。その教育行為を「インターベンション(介入)」として位置づけ、言語及び非言語の二側面からその内実を探り、かつ育成のための教員研修の開発まで研究の先端が及んできた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

松友一雄、大和真希子、言語活動を活性化する教師のインターベンションを支える「見取り」に関する研究、福井大学教育実践研究第 39 号、査読無、2014、pp49-58

松友一雄、言語パフォーマンス能力の質を捉える理論的枠組に関する研究 国語科授業における現象的側面に着目して、国語国文学第 52 号、査読無、2013、pp21-28

大和真希子、松友一雄、小学校低学年の授業における教師のインターベンションの共通性と効果に関する研究、福井大学教育実践研究第 38 号、査読無、2013、pp45-53

松友一雄、大和真希子、言語活動の質を向上させるための教師のインターベンションに関する研究 言語・非言語コミュニケーションの観点から、福井大学教育実践研究第 37 号、査読無、2012、pp1-10

松友一雄、言語活動の質を捉える評価方法に関する研究、国語国文学第 50 号、査読無、2011、pp45-63

宮本浩治、言語活動の充実のために 学習の足場作りとしての教師の問いかけ、ことばのまなび 25 号、査読無、2011、pp8-9

[学会発表](計 2 件)

松友一雄、国語科の授業作りと評価を考える—教師の「見取り」とインターベンション—、全国大学国語教育学会第 126 回、2014

大和真希子、松友一雄、学習者の言語活動を支える教師のインターベンションに関する研究、第 24 回日本教師教育学会、2014
[図書](計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松友一雄 (MATSUTOMO, Kazuo)
福井大学・教育地域科学部・准教授
研究者番号：90324136

(2) 研究分担者

宮本浩治 (MIYAMOTO, Kozi)
岡山大学・大学院・准教授
研究者番号：30583207
大和真希子 (YAMATO, Makiko)
福井大学・教育地域科学部・准教授
研究者番号：60555879
牧戸章 (MAKIDO, Akira)
滋賀大学・教育学部・准教授
(平成 24 年度まで研究分担者)